

描画を通じたコミュニケーション：
人間不信を標榜しながらも、
他者とのつながりを希求する青年 R 氏の事例

村瀬 嘉代子^{a,b,c}

^a 大正大学

^b 連絡先 170-8470 東京都豊島区西巢鴨3-20-1 大正大学
Email: kayoko.murase.phd@gmail.com

^c R氏を初め、R氏との出会いを契機に実に様々な多くの方々からご示唆や支えを戴いたことに感謝申しあげる。

要約

本事例研究は、介入開始時に18歳だったR氏との心理療法プロセスを報告する。6ヶ月のあいだに全10回の面接を実施した。当時、筆者は、臨床家としてまだ経験も浅く、一方では人を人として遇する態度、そしてもう一方では現実生活の場への適応を大切にする統合アプローチを思惟する最中であつた。来談当初、R氏は、家庭内暴力がひどかつた。異なる精神科医から、パーソナリティ障害、統合失調性情動障害、非定型の精神病等の診断がつけられていた。それまでの話すことを介した通常の心理療法も薬物療法も成果が上がらなかつたため、筆者は、人を人として遇し、素直さと真剣さに特徴づけられる関係を作れるよう心がけ、感情を表すため一方法として描画を用いた。R氏が描いた一連の作品を本論文に提示した。これらには、歴史的人物が次々に描かれるが、その変移が治療的变化と並行している。心理療法を通して、R氏の攻撃性は和らぎ、筆者に対しても敵意ではなく、つながりと尊重を求める欲求からかわるようになっていった。終結後40年近い年月が流れたあと、R氏のご家族が、別人のように落ち着きを取り戻し、平穩に暮らしていることを報告してくださった。筆者は、本事例のいくらか特異な臨床的判断についての根拠を (a) 当時の日本における心理療法実践の文脈、(b) それまでのすべての治療を中断したR氏が当時求めていたこと、(c) R氏および彼のご家族と関連する他の要因との関連から述べる。

キーワード: 描画, 統合的心理療法, 日本人のクライアント, 治療的コミュニケーション, 治療関係, パーソナリティ障害

1. 事例の背景と方法

R氏の面接を担当するようになったのは、45年も前のことで、筆者はまだ30代前半のころだった。当時は、我が国が第2次大戦後の困窮混乱期から、経済復興の軌道を進み始めた頃である。

事例を挙げて、描画をコミュニケーションのツールとして、心理臨床場面で効果的に使うことについて、事例をもとに検討してみる。（事例は臨床の本質を損なわない程度に改変が加えられている。）

この事例研究は日本描画テスト・描画療法学会第23回大会の特別講演の演題として、高橋依子理事長より命を受けて発表した。貴会にも毎回のように出席されていた中井久夫氏（1984）は患者の絵を画集にするようなことは患者を売るようだと考えられ、おびただしい量の描画を臨床の中で用いられたが、殆ど印刷物にはされていない。中井氏の見解は、全くその通りだと思う。しかし、言葉では伝わり難い考えや気持ちが絵に現されて始めて伝わり、そこから閉ざされていたコミュニケーションの緒が見いだされるという事実はある。

私がかつて聴覚に障害を持つ上に重篤な発達障害を持ったり、精神疾患を病まれて、文字はもちろん、手話や指文字も使えない方々とささやかなコミュニケーションの緒を見つけたのは、相互似顔絵法（村瀬，2005）を途方に暮れた挙げ句に考え出したことによる。筆者の心理臨床において描画はコミュニケーションチャンネルの緒として貴重な役を果たしてくれている。

R氏の事例を取り上げてお話することについて、多くの逡巡があった。だがR氏のお妹さんに40年を経たお目にかかり、その後のいろいろを伺ったこと（第8節で詳述）、一見、（1）ネガティブに受け取りやすい対象（ここではクライアントの暴力中心の描画）も注意を凝らして観れば、潜在可能性を見いだしうること、（2）その小さな点をいかに広げ、現実生活をよい生きやすい方向へと転換していくか、（3）小さな緒から途切れかけていた人やこととの関係をどう繋ぎ広げることが可能なのか、を考えたいと、ここにR氏の例を挙げさせて戴いた。

本事例研究において、面接ごとの変化を追うため、または心理療法全体の効果を測定するために標準化された量的指標は使われていない。この心理療法が行われた当時、その効果を量的に測定することはほとんどなかった。心理療法の効果は、症状のリストを上げてその程度を評定できるようなものよりもはるかに複雑であると考えられていた。当時は、そのような症状に関する心理検査や尺度を重視しない力動的見方が主流であったこともその理由の一つである。筆者の実践では、心理的適応は、クライアント、そしてクライアントと生活をともにし、より長い時間彼らと接触する方々との対話から、健康と成長についてクライアントの生活のより全体的な像を描くことをより重視していた。R氏は、権威に対する疑念や反抗心を強くもっていたため、一般的な心理検査を実施

しようと試みたら抵抗していたかもしれない。心理検査は、治療関係を損ね、過去の心理士や精神科医との困難を繰り返すだけになってしまう危険もあった。そこで、筆者は、両親から受けたR氏の行動の変化と、筆者が受けた印象とを比べ、心理療法の進捗を評価するのがよりよい指標となると判断した。

R氏の事例研究は、毎回の面接の終了後につけたかなりのプロセスノートに基づいている。録音・録画機器は用いていない。プロセスノートは、クライアントの際だった発話、重要なやりとりや出来事、また、面接中に扱ったその他の重要な題材などを書き留めてある。R氏との面接のプロセスノートは完全な逐語ではないが、面接中、そして面接と面接のあいだに起こったことに関するかなりの量にのぼる記録である。これは、心理面接の録音は、侵襲的であるという考えが強かった時代の訓練と実践の一部であり、録音は特に子どもの心理療法において避けられた。筆者がカリフォルニア大学大学院バークレー校の奨学生として留学した際、面接の記憶から逐語を再現し、それを録音した内容と比べることが訓練の一部であった。このような実践を訓練修了後も続けたことで、担当するクライアントと彼らとの面接をよりしっかりと記憶できるようになった。

2. クライアント

心理療法開始時において、R氏は18歳、小学校の中学年から断続的に不登校、中学以後家に引きこもり暴力破壊行動。入院歴数回、入院すると別人のようにおとなしく落ち着き退院要求。退院するとたちどころに情緒不安定となり粗暴に。通所の面接も10カ所以上を転々。安定した関係を一つとして形成できず、そのうちにR氏の方から中断。

3. 理論的指針

心理療法における肯定的な作業関係の役割については、カール・ロジャースによってその地平が切り開かれ、クライアント中心療法の理論と実践として表された（たとえば、Rogers, 1951）。その後、クライアントとの関係において臨床家が共感し、深く肯定し、認めることなどといったことの重要性は、膨大の実証研究知見（たとえば、Norcross, 2011）によって支持されるようになった（村瀬・村瀬, 2004）。

心理臨床の営みにおいては、クライアントとの間に肯定的な作業の関係を作り出していくプロセスの一つは、心にしっかり届く、開かれた、素直なコミュニケーションの緒をどう見だし、成り立たせるかということにある（村瀬, 1996, 1997, 2001, 2003, 2008, 2009; 新保, 2012）。R氏の描画は

コミュニケーションの媒体として極めて有効であったが、臨床において描画をコミュニケーションのツールとして効果をあらしめる2つの主要な要因について考察してみたい(村瀬, 2005)。

I. 日常の営みとして絵を観ることと心理臨床の営み (プロフェッション)として描かれた絵を受け取ること

前者、即ち日常生活での絵画鑑賞は基本的に個人の自由なオリエンテーションに委ねられている(村瀬, 1996, 2005)。後者、すなわち心理臨床場面で描画にかかわる場合、セラピストはクライアントの描画と心理臨床実践に底通する時代についての認識をもとに時・所・位の認識を基本的に持つことが要件である。以下のように問いに答えることが役立つだろう。

- 今はクライアントにとりどのような時か。
- クライアント・セラピスト関係、あるいはこの両者の周囲の状況にとっていかなる時か。
- セラピイの目標に照らしてどういう時か。
- その臨床の場の特質は何か。
- その場において、関係する人物に期待される役割や機能は何か。
- その臨床の場においてセラピストは自身の位置と責任をどのように理解し、自覚しているか。

日常生活では自分のありのままの姿勢で絵から伝わるものを受け取るが、セラピストとして描画にかかわる基本姿勢はニュートラルに素直に事実を受け止めると同時に、描画についての印象や思考、時に visceral (直感的、内蔵に響き感じる) な感覚を正直に自分の所与のものとして認め、それらが生じるセラピスト自身の内的過程にも関心を向ける。

セラピストの内面の思考や感情の動きは、描き手、クライアント自身の内にも呼応して生じる。その動きは、描き手、クライアントに暗黙の裡に通じ、描き手と受け取り手(セラピスト)の間に、セラピストにありのままを受けとめられたという感覚を伴ってクライアントの緊張を緩め、コミュニケーションの糸口が生じ、治癒や改善へと向かう可能性が生まれる(村瀬, 2003)。

II. コミュニケーションを成り立たせる要因

40年にも前になるが、土居健郎は臨床の真髓を説いた著書(1973)の中に、相手のこころを理解することの難しさ、大切さを現した格言、「伝えられたものを伝えられたままに受け取るとは教養である」(Goethe, J.W.)を引用している。コミュニケーションとは表現の仕方もさりながら、受け取

り手のあり方が重要なのである。コミュニケーションについては、伝える技法のレベルで考えるだけでなく、受け取り手の姿勢、器こそが問われねばならない。

ロジャースのクライエント中心理論（1961）と一致するが、芸術療法の基礎となるのは、臨床家がクライエントに対しいかなる場合においてもまず第一に一人の人として向き合う態度である。人は生まれ出るとき、自分に纏わる要因、すなわち生物学的素質、親、家族、民族、時代など、何一つとして選択できない。生まれたときの所与の要因は平等ではない。臨床においてはこの不条理に想いを致し、どのようなクライエントであっても、まず一度は無条件にその存在の必然性を受け止めることが基本である。存在を受け止められたという安堵感がクライエントにその不条理を受け止めようとする姿勢を生じさせるのである。この態度を臨床家の営みの基本姿勢として、以下の点を効果的なコミュニケーションの緒をもとにしたクライエントとの良い関係を確立するための留意点を提案したい（村瀬，1996）。

第一に、描画の受け取り手であるセラピストは言語表現を大切にし、相手のところに届くような言葉とは何かについて意識的でありたい。それにはまず、ただ情報を伝達するという話し方ではなく、話しながらクライエントの状態を観察し、同時に自分の語り（つぶやきもあろう）を聴き、これがどのように伝わっているかを考えて調整しながら話す、つまりクライエントとの相互関係の中で、刻々話の内容、話し方は検討されて状況に合わせて調整されるようでありたい。

第二に、セラピストの言葉、話し方に求められるのは公共性があり、分かりやすく、明確で、出来るだけ個別的であること、しかも用いられる言葉は、セラピストの身体を潜らせて自身が本当に納得した言葉になったものであることが必須である。

第三に、セラピストは描画から受ける印象、それに基づいて浮かぶ自分の様々な想念について、自分の知識と経験を瞬時に総動員して想像力を巡らし、豊かに膨らませるようにすると潜在している可能性、レジリエンスに着目できる。この経過を通して、コミュニケーションの成り立ちが難しいと見なされがちなクライエントとの間に繋がりが生じうる。

このコミュニケーションが生じるための要因と実際の展開過程を図1により示す。より詳しくいうと、図1には、臨床家とクライエントのコミュニケーションの過程の発展を少なくとも5つのステップからなることを示している。全体として、臨床家がクライエントの体験的世界に心を開き、それを知覚すること、クライエントのコミュニケーションに対して臨床家が抱く思考、感覚、visceralな感覚に心を開き、知覚すること、そしてこれらの感覚を使って、クライエントに合ったやり方で、簡明な言葉で伝え返す。

4. クライエントの問題のアセスメント, 治療目標, 強み, 個人史

突然の異例の出会い

R 氏の面接担当者がその激しい攻撃性に疲弊して突如入院したため、スーパーヴァイザーを勤めていた夫村瀬孝雄が急遽代わりに R 氏の面接を引き受けることになっていたが、学園紛争が激烈化し、大学での通信がままならい状況が生じていたため、連絡のため自宅の電話番号を報せてあった。自宅で留守番をしていた筆者は何の予備情報も無いところで電話を受けることとなった（以下「 」内は R 氏、『 』内は R 氏の家族、〈 〉内は筆者、“ ”内はその他の発言）。

ある日の午後 7 時頃、R 氏から夫・村瀬孝雄への面接日時確認の架電がある。今は不在、在宅予定時間を告げるが、受話器を置く気配がない。筆者は自分の事務的用件の電話ならばこちらから受話器を置くこともあるが、先方からの架電に対しては相手の後に受話器を置くのを常としてきた。

用件を確認しても、受話器を置かず突如「おばさんは一人で留守番していて寂しくないですか？」と低いくぐもったような声。事情あって心理療法を受けている人であろう。人として正直に答えようと瞬時に考え〈大勢の人の中にも淋しく感じる時があるし、たとえ一人でいても心の中に信じたり、大切に思う人との繋がりがあれば淋しく思わないときがあるでしょう？〉「うーん」と受話器の向こうで呻くような声。やおら挨拶して受話器を置かれる。

電話の次第を村瀬孝雄に告げると R 氏は 18 歳、小学校中学年から断続的に不登校、中学以後家に引きこもり暴力破壊行動。入院歴数回、入院すると別人のようにおとなしく落ち着き退院要求。退院するとたちどころに情緒不安定となり粗暴に。通所の面接も 10 カ所以上を転々。安定した関係を一つとして形成できず、R 氏の方から中断。直近のセラピストは R 氏の攻撃性に耐えかね入院した結果今の状態になっている。

未だ診断名は確定していないが、パーソナリティ障害、統合失調症、非定型の精神病等々などと診断名はいろいろ、現在の精神科主治医は「薬効をあまり期待出来ないタイプ、強い人間不信の回復が鍵」と言われ、少量の安定剤を処方されているのだという。

幾日も置かず、R 氏から電話。主人は留守と告げるが受話器を置かず、しばらく沈黙の後、

「村瀬先生の家のおばさんは不思議な人ですね。」

〈?（無言）〉

「僕は頭がよく、知能指数が非常に高いと思う。」

〈そう。〉

「僕はおばさんに知能検査してほしい。」

〈私は電話の取り次ぎをしているだけの役割、そういうことは出来ない。〉

「絶対、おばさんに知能検査してほしい。」

〈そういう依頼なら、今の主治医の先生に相談したら・・・〉

「いや、検査はこれまであちこちで一杯受けた。おばさんの検査受けてたい」同じ応答の繰り返し・・・。

〈本当に知りたいことは知能検査結果の数値なの？〉 〈高い数値が出ることを求めているの？〉 〈その数値を人に示して満足できるかしら？〉 とつい言葉にすると、
受話器の向こうで「うーん」という声と共にしばし考えている様子。挨拶して受話器を置かれる。

程なく、主治医と村瀬孝雄に R 氏は「村瀬先生のおばさん」の面接を受けたいと強く繰り返す。平素ほとんど口をきかない家族にもそう実現するように、と話したという。引きこもり器物壊しに明け暮れてきた R 氏の真剣な懇請に、R 氏の家族、主治医、村瀬孝雄はそろって筆者の面接を受けるのがよいのではと結論。筆者（当時、家事育児のため、退職を考え、いろいろ引き継ぎ準備中）は狼狽し、固辞したが父親が突如面接を求めて来談される。

R 氏の父親との面会

社会的エスタブリッシュメントは極めて高く、恰幅良く押し出しは立派で、礼儀正しいが高圧的な言辞。ただ、困惑憔悴した表情をちらりと覗かせ、今の重責ある職務をぎりぎりでは何とか果たしている、と。聴き入っていると次第に素直になられ、

『R は私の転勤のため、小学校 6 年間に転校 4 回、3 回目からは机にしがみついて泣き、教室から連れ出すのに難儀するくらいだった。今は不信感の塊だが、淋しかったのだと思う。』

一度口を噤んで瞑目されてから、

『家内も R の面接をこちらで望んでいます。これまで、病院や相談機関をどれだけ訪ねたか、どこでも落ち着いた関係は持てずに転々としてきました。今度は本人が希望しているので・・・。』

やむなく、

〈それでは一度お会いしてみましょ。電話の短い取り次ぎのやりとりの印象で抱かれた期待に違ふこともありましょ、そこでご相談しましょ。〉

と答えた。父親はやや安堵した面持ちで席を立ちながら、『家内も精神科に長らく受診中です』と呟くように云われた。

R氏の父親から伝えられた家族構成：

- 父親は、50代後半でかなり社会的地位が高い。
- 母親は、50代後半、専業主婦。長期間精神科受診中。
- R氏は、18歳、中学時代、ほとんど不登校、相談、カウンセリングおよび精神科の受診歴は長い。
- 妹は高校1年生。

5. ケースフォーミュレーションと介入計画

R氏は心理的苦痛度が非常に高く、極度に不適応状態の18歳の青年であった。小学校中学年から断続的に不登校になり、中学以後まったく通学することはなく、ほとんど家に引きこもった。親に対する暴力、極度の情緒不安定、加えて破壊行動もみられた。これまでの入院治療や通所の心理療法も一時的に改善と言えるような状態が現れるが、その変化を定着させるには至らなかった。実際に、筆者がR氏本人とはじめて会ったとき、前任セラピストはR氏の激しい攻撃に耐えられず入院中であった。

この暗澹たる状況にもかかわらず、R氏はポジティブな兆候も見せた。たとえば、過去に数度入院したとき、とたんに別人のようにおとなしく落ち着くことができた。退院を要求するための行動であったとは言え、肯定的な方向へ行動を変える適応力を見せたことは確かであろう。加えて、R氏は、筆者が彼のセラピストを務めることに興味を示して自分で頼んできた。そして両親を使って筆者を説得しようとした。当初ためらいをみせた筆者をなんとか押し切ろうとする彼の試みは、感情的つながりを求める強い動因を反映していると言えないだろうか。最後に、筆者が初回面接で知るように、R氏は、苦しい葛藤状態にあり、強い怒りを表していたが、その中には共感的な聴き手に自分の思いをくみ取ってもらいたいという欲求が強く表れていた。

精神病理が全体の背景にありながらも、彼がこれらの肯定的な兆候を見せていることは、上述したロジャースのクライアント中心療法の考え方がここで適合性をもっていると言えるだろう。この理論は、R氏のような精神的な困難を抱えた人物であっても、その病理の背後には、自己実現へと向かう肯定的な力が存在し、効果的なコミュニケーションの回路を作るために、個人を尊重し、受容し、あたたかさに満ちた、偽りのない対人関係をクライアントとセラピストのあいだに形成し、これらの力に到達し、それを育むことができると仮定する。R氏が私を彼のセラピストとして求めてきたことは、このようなコミュニケーションのしっかりとした土台を与えてくれた。理論的指針の節に示したことに加えて、筆者は、話すという媒体以外のコミュニケーションの方法として、描画などを使うことも少なくない。そのため、R氏の事例でも、彼が怒りを言葉によるコミュニケーションを通して調整して表すことが特に困難であったことから、セラピイの一部として描画を試してみることにした。

6. 面接の経過

初回面接：ささやかな可能性の芽

R氏は黒縁眼鏡をかけ、青ざめてやせすぎ、18歳とは見えず、30歳近い印象。怒りと倦怠感と猜疑心がない交ぜになったような表情。重苦しい不気味感を一瞬感じたが、手がかすかに小刻みに震えているのを必死に留めようとして、それでも震えは止まらないのに気づいた。¹ [極度に緊張している・・・、辛いのを気取られまいとして大変そう、電気コードの被覆が剥がれているような過敏さがありそう・・・、感情的でいながら一方で思考型、矛盾してる・・・、だからコントロールが難しいのだろう・・・。そうだ、正直にありのままにと考えた。]

自己紹介のあと、

〈電話では受話器を先に置かれるのを常としていたので、つい思わぬ展開になり・・・、お役に立てるかどうかわからない、正直に話してみたい。自分から強く希望したからといって遠慮なく意見を言って下さい。〉

やや緊張の緩んだ表情で、しかしモノトーンの低い声でR氏は次のように語った。

¹ 本事例研究において、[]内の文章は、筆者がそのときの感情や内的思考を示す。

「ここ数年、笑ったことは一度もない、悲しいはずの時も涙が出ない、頭でいろいろ考えるが感情が伴っていない。人間は信用できない。」

[一見、精緻に理論的に語るが、何かに拘束されているような堅さが感じられる。強い情緒的剥奪体験をしてきて、気持ちを切り離して何とか耐えようとし、しかしそれは苦しくて辛い葛藤状態にあるらしい、強く冷静を装うとしているが辛そう・・・]

世間や人間への怒りや不信を抽象的に語った後、

「面接を希望するにあって、家では信用調査機関で先生とその親族について調べた。これという非がなかったもので、家でも面接を御願ひすることにした。」

[一瞬、驚いた。だが、取り次ぎ電話の話し方から、面接を希望するのはなんとしても異例であるし、確認したくも思うであろう、しかもどういふ場合でも、被面接者は面接者について、口に出さずともどういふ人か注目し考えるであろう、こういう調査するのも宜なるかな、と考えられる、と思い直した。]

R氏は人間を信じられない、殲滅したい、と繰り返し、筆者の表情を伺うように「怖くないか」と尋ねた。〈そんなに強く人が信じられないということは、想像だけれど本当に大変で、辛いことであろうと思う〉と答えると、R氏は「これまで、どこでもたいてい薄気味悪がられていたのに・・・」と意外そうに呟き、面接継続を希望した。

閉じこもって、堂々巡りの思いにとりつかれていることから、自分の気持ちを確かめながら、自分の感情が自然に戻ってくるようになりたい、というR氏の申し出に、言葉だけではなく、何か描きたい絵を描いてきて、それを手がかりにしながら話す観念の次元での上滑りの会話にならず、自然に生活に根ざした実体を伴う言葉が増し、感情が繋がっていくかも知れない、と筆者が提案するとR氏は絵を描くことに意欲を示した。

のちに読者もご覧になるよう、R氏はたぐいまれな芸術的才能と関心をもっていた。筆者はそれについて彼がはじめて描画をもって来るまで全く知らなかった。全くの偶然と言って良い。筆者が描画を面接にもってくるように求めたのは、面接を行ったのが筆者の自宅であり、箱庭など表現のための道具が他になかったからである。描画は、筆者に対して直接表すことができないような感情の一部を表すためのとても良い方法だと感じた。R氏の芸術的才能は疑いなく素晴らしいものであったが、彼のセラピーに対する動機付けと、しばし筆者にぶつかってくる形で表された自己表現へ

の熱意がこの能力をさらにのばすのに役だったようである。彼は、絵を描き、描いた人物の言葉を加えるのに相当の時間をつぎ込んでいた。

第2回目の面接：ヒットラーとムンクの「叫び」 (図2)

1週間後、R氏はA3の画用紙に4Bで細密に描きこまれた図2を筆者の表情を覗き込みながら差し出した。ヒットラーとムンクの「叫び」の間には剥き出した歯が描かれ、背景は無数の血管の浮き出た眼、中には垂れ下がり、一見してうーん、激しい攻撃性と怯え、孤独、他者からの眼差しへの怖れ、敵意などが一杯の世界にいる、と感じ取れ、予想はしていたが改めて毎日の大変さが想像された。だが、ヒットラーは実物より良く模写されているが、どこか幼くナイーヴさがある。さらに、これだけの絵を仕上げる集中力とエネルギーにポジティブさを感じた。

R氏は筆者が静かに絵に見入っている様子に驚き、

「怖くないのか。気持ち悪くないのか。1週間、食事と風呂、睡眠時の他はすべて、この絵を描くことに集中し、描いては消しを繰り返して完成させた。この様子を見た母親は気持ち悪い、そんな絵を持参するなど言ったが、そうやって静かに感動したようにこの絵を見られるとは不思議だ」と。

筆者は前述の印象を述べて、

〈気味悪いというより、こういう題材を選ぶ状態はさぞいろいろ辛く不本意なのであろう、でもここまで描く集中力、それを可能にした必然性に感心した。このヒットラーは子どもっぽくて可愛いところもある・・・〉と。

R氏は安堵と怒りが交錯した表情で要約、次のように語った。

「この1週間、この絵を描くのに没頭した。モチーフは自然に手が動いてこういう絵になった。母親は途中で気持ち悪いから早く止めて別の絵を描くように、そんな絵を持参するなどと止めた。先生は静かにじっと黙って絵を見ていた。意外だ。ヒットラーに心酔している。伝記や記念グッズをそういう専門店で購入し、大切にしている。彼の演説のレコードも持っている。青年将校用の長靴も持っている。世間ではナチスを悪だという。だが、ナチスの要素は人間の中に程度の違いはあれある。それを自覚しないから人間は信じられない。そういう欺瞞的な人間を殲

滅したい！化学を自習し、無臭の毒ガスを作っているが無臭というのは難しい・・・」

と筆者を覗き込んで薄笑いを浮かべる。[激しい矛盾した気持ちを抱えて生きるのは辛いであろうと想像する、破壊を望むだけが R 氏の望みだとは絵や話し方、態度からしては考えられない、今の状態を変えたいと思うからこそ来談されるのだと思う。] 葛藤を抱えて暮らす日々はつらいであろうと推し量る、と伝える。R 氏は半ばほっとしたように半ば感情を抑え込もうとして筆者を凝視する。退室時には表情が和らいでいる。

第3回の面接：スターリン (図3)

次回、R 氏は挑戦的に筆者の目を覗き込みながら、「裏も見て」と図 3 を差し出した。裏には破壊を賛美する論調の文が思想史や哲学書からびっしりと抜き書きされている。中でも「人類を幸福にするには人類の大半を殺してよい。帝国主義のスパイを虐殺せよ」に強くアンダーラインが引かれ、裏面は破壊を賛美した記述の抜き書きで埋め尽くされている。

R 氏は筆者が静かに読んでいるのに驚き、感想を尋ねる。筆者は R 氏の話、絵や仕草からその日常家庭生活、生活歴、その他を想像する。荒涼索漠としたもろもろの背景、関係性が想像される。正直に素直に目前の事実をもとに答えていこうと決心する。

〈殺戮で根本問題が解決しないのは東西の歴史が証明している……。他者の命を絶った後、掟や法律を超えて、内心から深い罪の意識が立ち上ってくるのではあるまいか……。

このスターリンは実物と酷似しているが、でも慈悲心があるような表情をしている……。それは R 氏が語るようには本当に R 氏は冷酷無慈悲にはなれない。

文章や口頭で述べる強い破壊願望や殺戮への想いとは違うものをもっているのが滲んでいるようにも思われる。〉

[このスターリン像は R 氏の父親のイメージに似ていてはあったがその言葉は飲み込んだ。父親への両面的気持ちの強さ、それを抱く苦しさが想像された。]

退室するとき、R 氏の表情は落ち着いた表情になっていた。

面接間の電話

3日後、R 氏から電話。

「面接を終え、帰途に就くときは面接者の顔、声がやさしいものとしてここちよく残っている。帰宅して、時間の経過につれ、それが薄れ、怖い声、顔へと次第に変わっていく。怖くなって電話した。今、声を聴いたらイメージの顔も実物のものになった。」

と安堵したような声で受話器を置かれる。以後、こういう確認行為が次の面接までの間に行われるようになる。

第4回面接：人の顔に変移したチューリップ (図4)

4回目の面接のはじめに、R氏がドアを開けて声高に言い放った。

「よかった、そうほんとに先生はいた。実は電話したように時間の経過につれ、先生の顔と声が怖いものになり、不安だった。そう変わらずにこうしているのだとほっとした・・・」

父親が社会的に高い地位にあることへの自慢と今の自分とは遠い存在にあるように思える苛立ちを語るが、話は抽象的で父親に対する激しく矛盾した気持ちを持って余しているように見える。

図4の絵はこれまで同様独りで鉛筆が走って描いたとのことだが、チューリップのつもりが人の顔になり、自分でも変だと思うと。

スターリンの肖像は、彼の父親にそっくりであったが、この不気味な^{ようかい}韜晦なチューリップは、R氏の母親イメージではあるまいか。父親に対するよりも母親に対する混乱したネガティブなイメージがあり、母親との間は父親のそれよりもっと難しく、辛そうで、それゆえ意識化しまいとしているのであろうと咄嗟に思われた。ひとしきり父親についての屈折した気持ちを語ると礼儀正しく表情を殺して退室された。

母親が求めて来談

一見して、母親は図4の顔の表情にそっくり、前回ちらりと閃いた考えが的中しているのではと息を呑む驚き。母親は筆者をしばらく無言のまま凝視されてから、堰を切ったように概略、次のように語られた。

『夫とは結婚当初から不協和、私は地方の名家の生まれで大事にされたが結婚前から精神科受診が始まり、現在も治療継続中。もう受診歴も長い、一向に軽快しないので精神科治療を信用していないが、まあ、通っている。

強迫症状が強く家事は負担。自分でも止めたいと思うが人間関係を裂くよう、裂くようにと振る舞ってしまう。

Rには3歳年下の妹がいるが、きょうだい仲良くしていると中を裂きたい衝動を抑えがたく、二人が喧嘩するように仕掛けるのが快感だった、止められない。育児は苦痛だった。

家の中はぼろぼろにRが壊し、夫の背広なども缺でジャキジャキにどれくらいされたか。いつも買い換えている。止めたり、叱ったりすると逆効果なので、時を待つ。パトカーを幾度か呼んだが、急に態度を変え、上手に対応するので、警官は家族が過剰反応していると引き上げるし、親も体面を考え、それ以上助力を求めない。

だが、このところ、Rはほとんど暴れない、しかし押し黙って不気味な雰囲気を漂わせ、緊張させられる。ただ、面接に通り始めてから、うまく言語化できないが何かRに起きている。あんな変な絵を描くことが心理療法になるのか。何か、不思議な感じである。相談機関や病院のどこにも繋がらなかったのに、今回の面接にはいそいそと出かけていくのが不思議でならない。こんなことならもっと面接回数を増やしてほしい、家庭内での暴力はめっきり減った。

[静かに聴いていると母親の高圧的話しぶりは自然な口語調になり、終わり頃には涙ぐむ。]

今まで、あちこち治療を受けに訪れたり、相談に行ったが、初めて自分のことや家庭内のことについて話をした。自分の気持ちについて話したのも初めてのような気がする、また、面会に来てもいいか』と。

〈望まれるときはどうぞ〉と答えると初めて淡い笑顔を浮かべて退室された。[おそらく育つ過程から、いろいろ不本意な辛さを経験して、結婚生活に入ること自体が負担だったのではあるまいか。さらに、家事や育児を適切にやれず、その結果いろいろ大きな歪みを起こしてきてはいるが、母親なりに苦しみもがいてきた、生きるのに不器用で、淋しい人なのだ、でも事態やRの状態が良くなることをこの人なりに願っておられる切実さが伝わってきた。]

父親が求めて来談

父親は前回に比べ、微笑を浮かべ穏やかな表情で入室され、大要、次のように語られた。

『R には、他者と分かち合える感情が戻ってきた。TV を見ている、涙を流している（家族に気づかれないように苦労している・・・）ほんの数語だが家族と普通の言葉を交わすことが出てきた。

R の描く細密な独特な絵に感心とも何とも一言で言えない気持ちになったが、これまであまり念頭に浮かべたことのなかったさまざまな過去のことが細々と思い出された。そして、R を不登校、暴力行為、激しい情緒不安定、などと考えてきたが、本当はさびしく、愛情を渴望している子どもなのだ、と今さらだが実感した。

自分は両親に早く死別した男子 7 人兄弟の長男、親戚に引き取られ、それも転々として育った。努力と忍耐の生活、自分の気持ちは押さえて成長した。微妙な感情のあやがわからない。
[威風堂々とした話し方からしみじみとしたトーンへ]

大学を卒業するとき、優しく聡明な女性と婚約したが、彼女は医療事故で急死。強い衝撃、その時自分の成績の良さを見込んで見合い結婚をすすめられた。女性なら誰でもよかった。心を病み入院歴もあることを承知で結婚した。病む人だし、いたわろうと決心してはいたが、生活してみて驚くことばかりだった。家事、育児はほとんどできなかった(具体例をさまざまに挙げられる)。ことに R に対し妻は素っ気なく、自分の実家に行くときも妹だけを連れて行った。そういう例をしばしば目にする部下や知人が自分と R をしばしば招いてくれた。

今、考えると痛いほど R のその時の気持ちはわかるが当時は不思議だ、で終わっていた。招かれた先の奥さんが優しくて料理が上手な家だと、帰宅してから R は荒れた。普通の奥さんの家では帰宅して R は普通だった。そのころは変だな、感じの良い家から帰宅したら良い気分であろうに、と考えたが R は自分の現実と引き比べて悲しかったのだと今は痛いほどよくわかる。

自分は仕事と家族の世話を両立させるべく努力し、社会的には栄進したが家庭的にはあれでは足らなかったのだと思う。

R は幼児期に昆虫をたくさん捕獲して首を引きちぎったり、野良猫を素手で捕まえて、指を眼につっこんだりしていたが、男子は野性的である方が良い、と考えて見過ごしていた。今、思うとそのあたりからサインが出ていたのだ。小学校では転校が 4 回もあり、別れを惜しんで大泣きし、机にしがみついて連れ帰るのに往生した。高学年から休みが増え、中学からほとんど不登校、学歴は中卒。

各種の相談機関を転々とした。気分の変動が激烈になり、暴力がひどくなってからは精神科に入院もした。ただ、急に態度がよくなり、筋道通った話をするので、早く退院となり、帰宅

すると元の木阿弥，ということであった。自分の部下を始め他人の前ではかなり繕ったよい態度をとる。

R は私には暴力を振るう。母親へはかかわりを持つていない。だが，家の中はぼろぼろ，什器や家電製品を何度も買い換えた。3 歳年下の妹は成績優秀で健康，兄が荒れ狂っている居間で昼寝をするくらいタフ。

R は不登校になってからヒットラーに憧れはじめ，グッズを収集したり，ヒットラーの講演レコードに聴き入り，難解な書物をいろいろ読み耽るようになった。だれの指南も受けない学習で独りよがりさや誤解は募ってきたのだと思う。

書物の知識をこれまであちこちの面接でぶつけ，面接者を自分勝手に批判し，失望していたようだ。静かに考えているかと思うと突然（と周りの人々にはそう思われた）激しい暴力が始まるという具合だった。

初めは信用調査機関で調べて，こちらに御願ひしたいと決めたが，今は R の状態の変わり様をみて，ここから御願ひする気持ちである。今日のような話をしたのは生まれて初めて。折りにふれ，自分も面接を受けたい・・・。』

[父親は多くの苦難に遭遇されてきてはいるが，自分を自嘲的に人のこころの綾がわからない人間などと言われるような人ではなく，真摯で情の厚い，しかも観察というか気づきは的確な人だと思われた。筆者が遮らずに聴き入っていると，話しながら自分で気づいていかれた・・・。これまで，語られる以外，R 氏にも両親にも，こちらからほとんど質問しなかったが，わずかな言葉の調子，姿勢や表情などから筆者が自然に想像していた家族生活と相当合致していた・・・。]

第5回面接：新しい眼と出会う (図5)

両親が別々に来談された半月後に R 氏はやや怪訝な面持ちで図 5 を差し出しながら呟いた。

「不思議だ。意識的ではなく手が動いて絵が描けてしまった。描いている時は本当に集中している。こういうモチーフを描こうと意識しないのに描けたのがこの絵。納得のいくフォームになるように何度も消しては書き直した。

この絵は不思議だ。自分の世界にあった眼とは違う眼が描けてしまった。植物の花代わりの眼は自分のこれまでの世界の眼に近いが，ナチスの青年将校が自信を失って倒れたり，亡くなった将校が昇天しようとしていたり，そういう前景の世界が壊れかけて，壁みたいのが破れて

違う次元から、これまでの自分の世界にあった眼とは違う眼差しが見える……。この絵の中に過去を悔いているヒットラーの青年将校がいるがどうしてこんなものを描いたのか解らない。」

[家族の話題に触れまいとしている……。筆者も尋ねない……。「お母さんは優しい人だ」、と言葉にして、R氏の表情は急に険悪になり、呼吸が荒くなる。筆者は静かに聴くだけ……。] 退室時ドアを閉めながら眩かれる。

「優しくて教養がある、そしてひけらかさない人を誰でも母親として望みますよ。」

[R氏の激しい攻撃性や観念的理屈の世界の底に深い悲しみと寂しさが重く沈んでいるように感じられた。]

投薬されている主治医は、

“いわゆる非定型で捉えがたく、アンバランスな発達、未成熟さもあって薬物(少量の安定剤)効果は期待できないタイプだが、何かトーンが変わってきた。足が地に着きかけているとでもいう感じ、その調子で”と。

[確かにR氏は初回に比べれば変化はみられるが、このままでは上滑りな印象があり、その欠損体験や寂しきは深い深刻なもので、このまま上昇的に変容するのではなく、次の段階の難しさに出会うことになる予感がした。]

第6回面接：変容することへの怖れ (図6)

予期したとおり、R氏は自分の中に意識的努力をしないのに何か変化が生じ始めたことに戸惑ったかのように意図的に偽悪的、破壊的、時にアナーキーな議論を吹きかけてくるようになった。1週間、討論会の準備のように書籍を読み込み、絵の裏にはびっしりと細かい字で筆者に向かって、攻撃的質問を書き、議論を吹きかけてきた。たとえば図6のようにマキャベリの肖像を入念に描き、裏には「君主論」の一部、殺人の正当性と方法についての抜き書きがびっしりなされているという具合である。R氏は抜き書き(R氏のその時期の主張でもある)についての意見を執拗に求めた。

筆者は基本的には必要に応じて文献にあたり、また経験事実を引用しながら、誠実に応えるように心懸けた。R氏の抜き書きは自分自身の憤りと攻撃欲求を強く正当化しようとして、文献がしば

しば牽強付会に引用されていた。それらを決して非難や軽んじることなく丁寧に元の意味を説明すると同時に、そういう考え方の他の考え方があること、辛い現実のなかにあっても、そうではない考え方や振る舞い方が可能な例を日常生活場面や文学作品を例に取り上げ話し合った。

大学の一般教養の社会思想史の時間にフリートーカーでもしているようでもあったが、基底には人の憎しみや怒りを破壊力に至らせないには、というテーマを考えていた。R は自分とは違う意見を聞いても悔しそうだが興奮せず何とか聴く姿勢をとり、考えを巡らせ、反論を試みた。

図 7 に、ゲッペルス肖像を描いてきて、ヒトラーのブレインとして、如何に強くナチズムに影響を及ぼしたかについて、賛美していたが、次第に高い知能を持っていたことが本当にゲッペルス自身や世の中に意味をもたらしたのであろうかと迷いにも似た発言がみられ、考え方が現実に関わりを持ち始めているように看取された。

図 8 にニーチェを描いてきて、どうして、こんな構図になったのか、かつての自分の世界にはなかった眼を手が独りで動いて描いてしまった、と。裏面にはニーチェの言葉がびっしり小さい文字で黒々と書かれ、本質的に暴力を必要と認めている哲学者と R 氏は解釈し、引用している。

ヒトラーはニーチェの考えを体現した人で、世の中一般人が批判するような悪い人ではない、と力説する。ヒトラーのような現実行動に及ばずとも、人間の内を深く見つめれば、限りなく神に近づく要素もあれば、その逆もあると語りかけ、三人称的に自分と全く切り離れた議論を続けることにそっと疑問を呈すると R 氏はむっとして腰を浮かせるが、すぐ冷静になり、考え込む。

第7回面接：観念と暴力の世界から現実の生活へ

母親が来談。母親としてより、自身の生きていく苦しさについて語られる。

『実家の両親も高齢化し、実家へ退避するとか、いろいろ助力を頼むこともできず、R が落ち着き始めたのは嬉しいけれど、自分は何か無性に不安。夫は立派で責任感は強く、頼もしいが、自分は本当に素直に話し合った記憶がない。R の暴力を恐れて家族が食卓に共に揃って座ったことはもう 5, 6 年間、一度もないような気がする。一人ずつばらばらに立って食べることもしばしば・・・。』

[仕事の場の仕事目的の関係以外は知人、友人、近隣との打ち解ける交流なく、家族間にも気持ちの通い合うやりとりが乏しい生活の荒涼とした心象風景が現実感を持って想像された。いかに素漠としたものか・・・。両親が一度でも食卓で向き合って素直に話す機会が何より今の時点では大切

だ、そして観念的に暴力論議をするより、R氏にとっても、普通の食卓状況を経験することは意味を持つであろう、と咄嗟に判断した。]

そこでR氏は筆者の家で夕食を共にする、その間、R氏の家族、ことに両親は筆者に語ったように素直に家族の間に語らい、これまでや今後についてありのままの気持ちや考えを分かち合われたら如何と提案した。母親の顔はパッと燈火がともるようになり、是非一度でもそういう機会を、と。

[R氏がここで非現実的な望みを一挙に膨らませ、感情的に収集がつかなくなるような事態に至らぬように配慮が必要であることを筆者は自覚しつつ、子どものことをそれなりに案じ続けてこられた両親が落ち着いて素直に話し合う機会が要るであろう、と熟慮した上での提案であった。この試みもつプラスとマイナス両面、さらに注意すべきことについて、いろいろ考慮した。

筆者は、時としてクライアントを我が家へと招待する。これは、当時の日本の臨床実践でも一般的なことではないが、厳しく禁じられていたというわけでもなかった。筆者と夫の経験では、子どもと思春期のクライアントの多くは、臨床家に個人としてつながりをもてないと心を開いたり、信頼したりなかなかできない。クライアントとその家族を我が家へ招待することは、境界の曖昧さよりも純粋性や真正さの表現になる。この場合、筆者が意図するのは、家族面接をより開かれたリラックスできる雰囲気の中で行うことである。R氏はほとんどすべての精神科医と心理士を拒絶した。というのも彼らが役割を通してR氏と接触したためである。私はそのままに一人の人としてそこにしようとした。

料理をしてご飯を出して、一緒に食事をとることの治療的役割を筆者は大切にしている。食べ物は、抽象的で概念的なかわりの世界のみにとどまらず、実態があり、具体化された体験の水準へとコミュニケーションを導いてくれる。食事を出すことは、愛情、あたたかさ、おもいやりなどを形にすることである。それは、現実的な人と人の接触へと私たちを導く。すべてのクライアントを招待するわけではないが、このようなかわりが必要であるときは、そうすることを躊躇しないだろう。]

R氏は面接のセッションを一度筆者の家族と夕食を共にすることについては素直に「嬉しい、期待している」と語った。

コミュニケーションと家族団らん (第7回面接と第8回面接のあいだ)

R氏は部屋のしつらえや窗外 [日没前で、花や木々の色が残光に映えていた] を無言のままじっと見つめ、行儀よく箸を動かし始めた。食べる速度の遅いことに^{びつくり}吃驚した。食物を少量口に運び、

ゆっくり咀嚼，飲み込むというより，どうやら口中で液体になるまでかまれた食物が喉へ流れ込むという具合である。普通に食べるようそつと促すと恥ずかしそうに小声で，

「この時間ができるだけ長く続くようにゆっくり食べている。生まれて初めて今，団欒や夕餉という言葉の意味が実感できる，通い合うということがわかる・・・」と。[そうなのか，R氏のテンポにさりげなく合わせることにした。この日の夕食は2時間以上かかった。]

いつもとは違い，R氏は理論闘争めいた議論を持ち出すことなく，「美味しい」「きれい」と目前の事実をもとに素直に感想を語り，もっぱら食事とボリュームを落とした音楽を楽しんでいるかであった。辞し去るとき，これまでになく礼儀正しく簡潔に挨拶した後，筆者を凝視して，

「センセイにあってから，自分で気づき始め，もやもやしていたことが何かわかった。知識がたくさんあることと本当の教養とは別のこと，それから社会的地位と人間性とは別のこと，社会的地位と人間性の質は比例しない・・・」と。

筆者が感嘆しながら同意すると，少し語気を強めた。

「こういうことに気づき，考えるのは当人にとっては苦しいこと！」

[そう，変容とはそれが望まれる方向のものであれ，本人にとっては大きな営みなのだ，それに自分は十分気づいていただろうか，と内省した。]

家族団らんのあと（第8回面接と第9回面接）

両親から，『食卓について夫婦で話し合っって，何か困難の渦中にまだまだあるのだけれど，ほっとした。新鮮で貴重な機会だった』と電話がある。父親は出勤前，Rとの散歩を日課とするようになる。Rは強迫行為が強く，家事がはかどらない母親を少し手伝うようになる。

Rは毒ガス造りの勉強より，普通の学習が必要だと思い始めた，と笑いながら語り，一方ですっかり遅れてしまったけれどこれからの生き方は・・・，と嘆息を交えながら話題にし始める。面接中の話題は現実生活に即応した将来を見つめる内容になってきたが，当初，面接者のもとを辞し去り帰宅すると，声や容姿が恐ろしいものへ変形し，面接者の実体を確認するために電話で確かめ始めた頃の行為をさらに深刻にしたような行動が始まった。

面接を終えて帰宅すると面接時に話していた現実生活に即応した将来を前向きに模索しようとする気持ちが薄れ、そこで湧き起こる気持ちを分厚い書留速達で投函する行為が始まった。封筒の宛名には「エセヒューマニスト」「トロッキスト」等と朱で添え書きされ、書留を受け取りに出る筆者に配達郵便局の人は微笑しながら手渡してくれた。内容は、

「どういう家族に生まれるかを人間は選べない、不条理である。自分は先生の家の子どもになれば、一挙に問題は解決するのに・・・今からでは年もとったし、もう遅い、腹が立つ・・・」

といった趣旨の反復であった。面接時には、落ち着いて手紙の非礼を詫びた。

遅れてしまった自分の人生軌道についての不安は変わらないものの、着手できるところからそれでも取りかかろうという提案に素直に耳を傾け、大学受験資格合格検定のことや、塾の利用 [昨今のように、通学時間に配慮された都立高校やフリースクールはほとんど無いような時代であった]、自習の仕方などについて話し合った。手紙の内容と面接内容との大きな乖離は R 氏にとり、自分自身の現実状況をうけとめるということが如何に重く難しいことなのか、当事者の苦しさを考えると、それでも踏みとどまり来談を続けて考えようとする R 氏に対して、自然に敬意にも似た気持ちが生じてきたりもした。

筆者が東京から離れ、セラピイの一旦中断

その頃、年に一度、筆者は一泊で子どもを連れ実家を訪ねていた [義母も病弱であり、筆者は長期の不在は控えていた]。携帯電話も無い頃で、R とその両親は都内に筆者が居ると思うから、R の家での暴力も収まっている。一泊でも行き先を教えておいてほしい、と懇願された。かなり遠隔地の実家の住所を告げた。ただ 1 日の滞在日に合わせて実家に書留速達が届いた。「そちらでもおそらく団欒のある楽しい幸福な家族の時間を楽しんでいることと想像している。焼き討ちしたい・・・」という要旨である。

書留だということで“立ち入ることではないが心配”と尋ねる実家の母に手紙の内容といきさつを話した。素人の母は静かにきっぱりと言った。

“その青年は本当にお気の毒な人で、周囲の人々のご苦勞も想像できる。だが、自分の器と立ち位置をしっかりと自覚することなくして何かを引き受けるということは間違いである。貴女の器はその青年を引き受けるだけの器ではないし、立場にも無い、事実を見つめて帰京したらすぐ自分には無理とお断りすることです。”

筆者は〈無理とお断りしたのにやむなく・・・〉と言うと“責任をもってことの判断をするのが当然”と母は静かに言った。[全くその通り・・・]

主治医は“ここまで変わってきたのだからあと一息、がんばって続けて・・・”と。

東京に戻り、R氏に次の面接で会った(第9回面接)。自分はいろいろ力不足だという筆者にR氏はこういった。

「意識して、やっているのじゃない、自分をどうにも出来ないのが自分たちクライアントなのだ、そこを何とかするのが仕事でしょ！」

やむなく続けることに合意したが、

〈変容していくことは第三者には想像でしかないけれど、本当に辛いと思う。でもこれは共同作業なのだ、私だけが何とか出来ることではない、目的を思い出しながら進めていこう〉と言った。

第9回面接：セラピイの再開 (図9)

この面接では、マルクス他5人のロシア共産党の政治家を指さし、「こういう人たちホントは嫌いでしょ、わかる・・・」とR氏は笑う。裏面には暴力や革命を肯定する文章が書かれているが「有名なこれら6人に混じってどうして革マル派の学生を描いたのか・・・。この学生は反省したのだけど時遅く内ゲバで殺された・・・」と静かに呟く。[面接開始時のような攻撃的、挑戦的な口調ではない・・・]

突然、軍人になりたいか、と尋ねられる。正直に否と。何か言葉を継ぐのを待っている様子なので、

〈自分より弱い年寄りや子どもは身を挺して守りたい。本当にできるか100%の自信は持てないけど、映画「風邪と共に去りぬ」の中で、平素は控えめなメラニーが家族の男性達が出征した留守家族の元へ南軍兵士が家に入ろうとしたとき、発砲してそれを退けたような・・・〉

と答えると、R氏は驚いた表情で「正規軍の軍人として昇進していくことなんか考えないのですか？」

〈そんなこと考えたこともないし、これからも無い。先刻の話は人として、保護されることが必要な人のために自分のできることを最善するべきだ、という普通の人としての理念よ、どうしても軍というならやむなく緊急事態に臨んだとしても民兵かゲリラ。〉

と笑いながら答えると、R氏はさらに驚いた様子。突然、どういう言葉が人に本当に伝わると思うか、と訊かれる。正直にあっさりと、

〈言葉が現実的行為によって、裏打ちされていること、受け売りでなく自分の身体を通して出てくる、つまり現実の行為や実体に裏付けられ、確かめられた言葉であろう。〉

と答えると、R氏は怒りながらもじっと聴き入っていた。

自宅での手伝いや片付けが多くなり、父親に数学や英語を習い、大検に備え始める。

第10回面接：最後の描画（図10），理性と行動力の統合

R氏は図10を提示しながら、これで絵を描くことは終わりにする、理由はわかるでしょう、と微笑した。そして言葉を継ぎ、「上段にヘーゲルとクラウゼヴィッツを、そして下段の真ん中になぜ森鷗外を大きく描いたのか当ててみて」と尋ねた。

〈ヘーゲルに象徴される知性(理性)と今も世界の士官学校で読まれる文献となっているという、戦争を力による政治と説いた「戦争論」の著者、クラウゼヴィッツの肖像が並べられ、下に上段の二人より大きく作家かつ医師、そして軍人でもある森鷗外が描かれているのはR氏の今の考え、人間は知性と行動力(時には強い力の行使)を兼ね備えたバランスある存在であることが望ましい、ということであろうと推測される。〉

とそっと答えると、R氏は嬉しそうに頷いた。今回の絵の裏には書き込みは無かった。暴力性に束縛されていたのが、自分をかなりコントロールできるようになっており、人間はバランス、統合がとれていることの大切さに気づいたのであると思われる。自分の行動を合目的に良い方向を目指しながら纏まりあるものにしていきたいと言う気持ちがこの図10には現されていると考えられた。その絵は、自己受容の高まりも表していた。軍隊または攻撃的な西洋の人物だけでなく、知性的で

あり、しかも軍人である森鷗外という日本人を加えたのであった。鷗外は、明治時代に日本を西洋の世界とつなげた人物として知られていた。

「鷗外というか、バランスのとれた纏まりのある人になれたらと思う」とはにかんだような表情の R 氏。今では絵を介さずとも、気持ちや考えを R 氏はニュアンスも添えて現す言葉でのコミュニケーションをもてるようになったのだ。自宅では毒ガスについての書物に代わって、大学受験資格検定試験用に参考書を揃えたという。

約 6 ヶ月間に計 10 回の面接を実施した。次回の予約は、面接で毎回話し合うか、状況によっては電話で話し合った。終結に近づいてからより面接間隔が長くなった。同じ面接時間を設けなかったのは、筆者が R 氏に自分自身のためのセラピーに主体的に関わるよう望んだからである。また、描画のため、そして振り返りのために十分な時間をとってあげたいと考えた。

R 氏からの電話：折り合いをつけながら自分らしい生き方を模索

久しく暴力は途絶えていたが、ある朝、母親のこころない一言で激高した R 氏は物壊しをしてしまう。動転している母親を横に自ら 110 番し、

「暴れました。この家で本当の病人はこの人(母親を指し)ですが、主婦として家族の生活には大切な人です。僕は今のところ役に立たない人間で、邪魔者ですから僕を入院させて下さい。入院したら少しはよくなります・・・」

と自ら希望して精神科へ入院。

R 氏は入院先では、模範患者として過ごし、1 ヶ月で退院した。自宅に戻ると検定試験を目指し、わからない箇所は父親に習い、自習の傍ら、家の手伝いなどもし、穏やかに過ごし始めた。この生活を継続してみるということで、主治医とも相談し、面接はいったん終了とすることを R 氏に提案、必要な時には連絡すると言うことで、一応了とされた。

しばらくして、R 氏から電話。素直に父親を褒めた。

「勉強のことばかりでなく、父親とはいろいろ話をするようになった。博識でしっかりした見識の持ち主だと思う・・・」

父と二人で、先生について話し合うことがしばしばある、父が先生のことを何て評したかわかりますか？当てたら偉いけど無理・・・」

とクスリと笑う声が聞こえた。筆者は R 氏がよい日々を過ごすように、目的を達するようと思うほか考えることはない、と答えると「父は先生が女性でいることは勿体ない、たとえば真の軍人になれる方だ、と言っています。僕もそう思う。」と R 氏は笑った。この電話が終結になった。[R 氏の先にある未解決のことを思うと少々ため息が漏れる気分であった。]

終結後

R 氏は 1 年以内に検定試験には体育実技（当時は試験科目に加えられていた）以外、全科目合格した。体育実技でマット運動の実技を終えた後、試験官への挨拶の仕方の不足を指摘されて、素直に修正しなかったことが原因だと父親から連絡があった。受話器の向こうで、父親は要約すると次のように穏やかに語られた。

『本人は、採点者のこころの内実よりも型を重んじる姿勢に違和感をおぼえた。言葉と行動の一致を大事に考えたい、おもねるのは嫌だ、と言っている。頑なだと思いが、R なりに随分と回復して人間的になった。本人はこれで高校卒の力はだいたいあると言うことが認められたと考え、あえて体育実技だけもう一度来年受ける気持ちはない、と言っている。階級とか、学歴とか、序列に強く拘っていた R が自分でそう決めた気持ちを大切にしたい……。』

惜しいと感じ、一瞬考えたが、家族共に納得して出された結論なのだ、と筆者は腑に落ちた。

フォローアップ時の接触

その 4 ヶ月後、突如筆者の自宅に R 氏と母親が来訪。進学した妹は学寮に残り、父母と R は東京から遠く離れ、帰郷してそこで暮らすのだという。仕事では功成った父親は R と自然農法を営むのだという。目前の母子は自然に気持ちの通い合う親子というように見えた。R 氏が言った。

「いざ東京を離れるというときになって、私たち二人が挨拶をしたいと思ったのはこの広い所に先生一人でした。」

[その言葉に、名状しがたい何か耐えがたい孤独の痛みに似た気持ちになった。] R 氏は言葉少ないながら落ち着いた表情だった。門口で見送る筆者に二人は幾度も振り返っていかれた。

その後、間欠的にだが年賀状が届いた。眠れないときに近隣のクリニックで睡眠薬を投与してもらおうが、まあ、無事に穏やかに暮らしています……、などと添え書きされていた。

7. 経過観察と情報のフィードバックの使用

セラピー継続中、R氏の投薬や入院を扱った担当精神科医と連絡をとった。またここで、当時聖路加病院ご勤務の土居健郎先生が学士会館で毎月開かれていた土居ゼミで、発表順でもあり、当時の規範からかなり逸脱した自分の臨床に関して、厳しいご指摘覚悟で、この経過を報告した。先生は同席の中井久夫先生、小倉清先生、広瀬哲也先生らと“今日の報告はホントに面白かった”と笑顔で繰り返され、反省と悔いで一杯の私に“これは成功だと思うよ”とおっしゃった。筆者は驚きまごつく心持ちになった。当時話題となっていたパーソナリティ障害の効果的治療について学びたいと望んでいた。多分、いささか消耗している私にまずゆとりを取り戻させ、自分自身でしっかり考え続けるようにとの御配慮だと受け止めた。

8. 心理療法プロセスと成果の全体的評価

セラピー終結時のプロセスと成果

繰り返しになるが、R氏はセラピー開始時に、高校中退の18歳の青年だった。ほとんど自室で一人で過ごし、家族とのつながりもなく、暴力破壊行動を繰り返し、手に負えない状態になると入院していた。「人間を信じられない、殲滅したい」を繰り返し、化学を自習し、無臭の毒ガスを作ることを考えていた。

セラピーのプロセスは、R氏が面接と面接のあいだに描いた一連の描画に反映されている。ヒトラー、スターリン、マキャベリ、のような暴力と支配と関連する歴史的人物の肖像画を鉛筆で丹念に書き上げていたが、世界に対する姿勢や経験が変容するにつれてそれが大きく変化した。最終的には、理性と知性を表すヘーゲル、戦争を力による政治と説いたクラウゼヴィッツを上段に小さく描き、下段により大きくその時のR氏の思考を反映する肖像画、文学、医学、戦力の統合を表す森鷗外を描いた。セラピー初期に描かれ暴力を象徴する人物がすべてヨーロッパ人であったが、最後に西洋とも通じている日本人である森鷗外が描かれたのは注目に値する。

標準化された量的質問紙はR氏の心理療法の成果を測定するために使われていない。しかし、心理療法終了直後のR氏の発言にはより向社会的な姿勢があること、検定試験の勉強をはじめ、ほぼ全科目合格したこと、母親、父親、妹との関係が大きく改善したこと、また以下に報告する長い月日を経たあとの妹による報告など、肯定的な変化を示す指標が数多く存在する。

R氏の妹からの長期的フォローアップ

R氏に出会って40年近く時が流れたある日、筆者が地方都市での講演を終えると、控え室に落ち着いた暖かい雰囲気のある夫人と傍らに爽やかな青年が寄り添って、挨拶したいと訪ねてこられた。

『私はRの妹です。あのとき、兄が猛然と暴れていても、私は落ち着いているしっかり者と見なされていました。しかし、実際には、兄の様子や両親の苦しみを見ていてどうすることもできず、生活は騒然としていたし、そのうち私たちはどうなっていくのかと本当に怖かったのです……。

不思議でした。そんなに荒れ続けていた兄が先生に出会ってから、文字どおり別の人のように次第に変わっていく経過を傍らで見ていると、嬉しく安心すると同時に、どうして？と不思議でした。

どういう方かお会いしてそのわけを知りたいと思いながら、接点もなく、結婚して東京から遠く離れて暮らすようになりました。いつかお礼を言いたいと思いながら果たせずにいました。

それが一般の聴講も可能というチラシを見て、息子（大学院生）と参りました。息子にも私が育つ過程で苦しい思いをしたこと、兄が先生に出会って自分の生き方を現実的に考えるようになっていったことなどを常々話していたので、一緒に聴講したいと来場したのです……。

郷里で両親も高齢になりましたが元気です。兄は農業と家作の管理をしています……。』

その青年は大学院を修了したら、対人援助職に就きたいと考えているとのことであった。

R氏やご家族の日々がよいものでありますようにと内心願いながら、かつて、土居ゼミで報告して以後、ずっと考え続けてきたことや悔いに少々光が差したようにも思われた。土居ゼミでの報告は、R氏との作業を振り返り、評価する良い機会になった。より適切な他の介入の仕方について学びたかったが、それは叶わなかった。同時に、あの波乱の日々を過ごされたR氏やその傍らで共に苦しみ、支えられたご家族、それぞれの人がこころの底深くに抱いておられた寂しさと誠実さに改めて思いを巡らした。

おわりに

R氏との面接の過程で、抱き続け、考え続けていた課題意識は次に挙げるような内容である。もちろん、これらについてはR氏に出会う前、仕事についてから抱いてきた課題意識ではあった。当時の筆者は経験も浅かった。筆者が逡巡したのは、自分の力量不足もあつたであろう。しかも退職

準備中という仕事上の立ち位置からして自分の力量に余ることをやむなく引き受けた面接であった。おののきながら強く意識し、自らに問い続けつつ一回一回、正直に臨んだ過程であった。

- 描画から伝わるものを、前もって抱くこちらの枠組みや姿勢にとらわれることなく、いかにそのまま大切に受け取ることが可能になるのか。
- 人のところに届く言葉、その人のためにそのとき、その場で意味をもつ言葉、どうしたらそういう言葉を持つことが出来るのか。
- 避けては過ごせない事実（時に厳しい内容であれ）を正直に相手と共に分かち合うにはどういう配慮が必要なのか。
- 自分の立ち位置を自覚して責任をとれる範囲でめいっばいの行為を迫られたとき、自分の「時・所・位」をどう的確に認識するか。
- 自分の器を過不足なく正確に捉えるにはどういう注意が必要なのか。

クライアントの背景事実は的確なアセスメントを行うには欠くことが出来ない。その状況について、そしてその他の機関の持つ役割や機能について主導的に速やかに情報を収集することが必須である。たとえばインテーク面接では、背景にある事実関係の情報を素早く集める必要がある。だが、一方で、相手に負担少なく、あからさまにする気持ちが定まらないのに、いたずらに聞き出すような面接は控えたい。どういうように聴くか、ということはもちろん大切であるが、どのような自分であつたら相手は自然と自発的に、それが仮に不利なこと、この世的に考えて秘しておきたいようなことでも語りだすのか、どういう自分であることが望ましいのかについて、セラピストとして、自問していることが大切だと思われる。

育ちや今生きている状況、関心、さまざまな機能的特質が全く違い繋がりや絡み合いの緒を見いだすのが難しいクライアントとコミュニケーションの緒を見いだす要因は何か。これらの問いへの完成した答えを筆者はまだ手中にしていない。むしろ、おののきつつ臨床の現場にあって、その瞬間、その瞬間、瞬時のうちに模索し、考えてとりあえず応えているのが事実である。ただ、これらの問いに対して、大きくぶれることなく対応していくには、一部、本稿の始めの部分と重複するが次に列挙することが基盤になると考えられる。何れも極めて普通のことである。

1. 人を人として遇する態度（たとえば、Rogers, 1961）。

2. 複眼の視野で気づく（観察眼）こと、経験を豊かに重ね、ゼネラルアーツを駆使し、根拠をもって想像力を巡らすこと。
3. 抽象と具象とが裏打ちし合った言葉、自分の身体の中を潜らせ、臨場感をもってその意味を思い浮かべられるような言葉、そういう相手の心に届く言葉を使えるように平素から心がける。
4. 多軸で考え、アプローチも必要に応じて多面的に。初めに理論や方法ありきでなく、目の前の課題をよく把握してからそれに適合する方法を適用する。時に必要に応じては創意工夫する。
5. 目的と手段を取り違えない。
6. 問題や病理を的確に理解することは必須ではあるが、他方、潜在可能性に気づく。
7. 一人称、二人称、三人称のスタンスを同時にバランスよく働かせる。感情移入的でありつつ、必要な客観性を保つ。
8. 物事を捉えるとき、焦点と同時に全体状況をも把握するように努める。
9. セラピストは自分の内面に生起する visceral（直感的、内臓に響き感じる）な感覚、感情、思考内容について正直に気づく。

まとめると、もっとも適切な心理療法実践は、理論、方法、客観性、人としてのかかわりの統合である。これらのなかで特に重要なのは、クライアントを一人の人として、そしてクライアントの世界を理解し、思いやり、尊重することにある。

文献

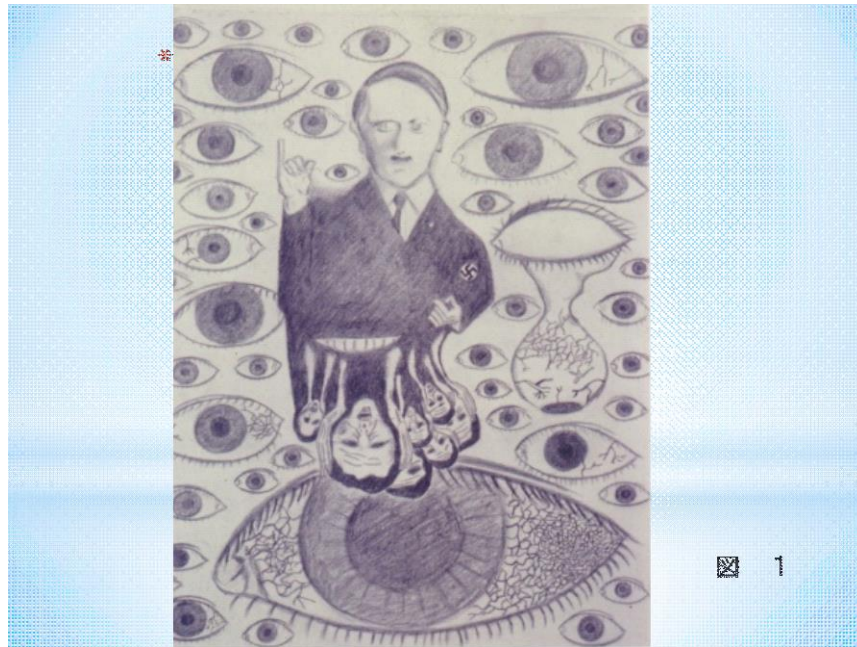
- Doi, T. (1973). *The anatomy of dependence*. New York: Kodansha International.
- 村瀬嘉代子 (1996). 子どもの心に出会うとき: 心理療法の背景と技法. 金剛出版.
- 村瀬嘉代子 (1997). 子どもの家族への援助: 心理療法の実践と応用. 金剛出版.
- 村瀬嘉代子 (2001). 子どもと家族への統合的心理療法. 金剛出版.
- 村瀬嘉代子 (2003). 統合的心理療法の考え方: 心理療法の基礎となるもの. 金剛出版.
- 村瀬嘉代子 (2005). 聴覚障害者への統合的アプローチ: コミュニケーションの糸口を求めて. 日本評論社.
- 村瀬嘉代子 (2008). 心理療法と生活事象: クライエントを支えるということ. 金剛出版.
- 村瀬嘉代子 (2009). 子どもと大人の心の架け橋: 心理療法の原則と過程. 金剛出版.
- 村瀬孝雄・村瀬嘉代子 (2004). ロジャース: クライエント中心療法の現在. 日本評論社.
- 中井久夫 (1984). 中井久夫著作集. 岩崎学術出版.
- Norcross, J.C. (2011). (Ed.). *Psychotherapy relationships that work" Evidence-based responsiveness, 2nd ed.* New York: Oxford.
- Rogers, C.R. (1951). *Client-centered psychotherapy*. Boston, MA: Houghton Mifflin.
- Rogers, C.R. (1961). *On becoming a person*. Boston, MA: Houghton Mifflin.
- 新保幸洋 (編) (2012). 統合的心理療法の事例研究. 金剛出版.

図1 コミュニケーションの生成過程

コミュニケーションが生じる面接の過程

- 全体状況を思考の視野に入れ、多焦点で観察しながら、その都度、必要な焦点化を行う。
↓
- クライアントの環境については基本的に受け身的な姿勢で、しかし、微少な手懸かりをもとに知見を総動員して根拠に則って想像力を働かせる → 瞬時に
↓
- クライアントの体験世界を想像すると同時に、自分の内面に浮かぶ感情、思考内容を正直に認識する → 瞬時に、即時的に
↓
- そこで、クライアントに向かって、独自性があり、平易で明確な言葉を、Visceral な感覚の繋がりを
↓
コミュニケーションが生まれる

☒ 2



☒ 3



☒ 4



☒ 5



図 6

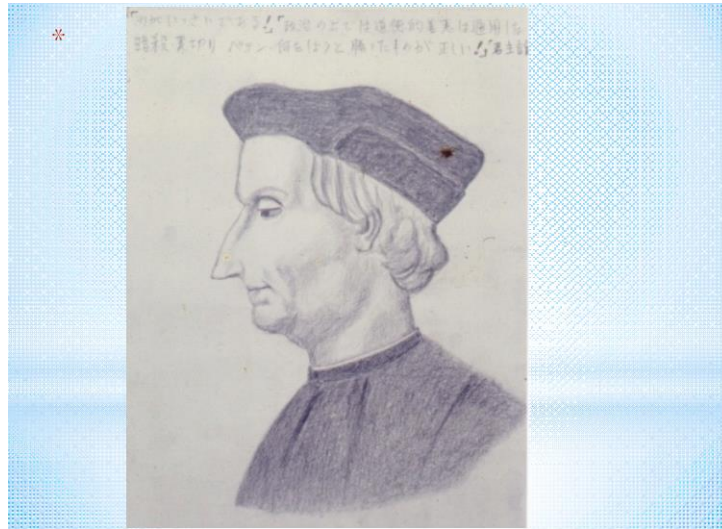


図 7

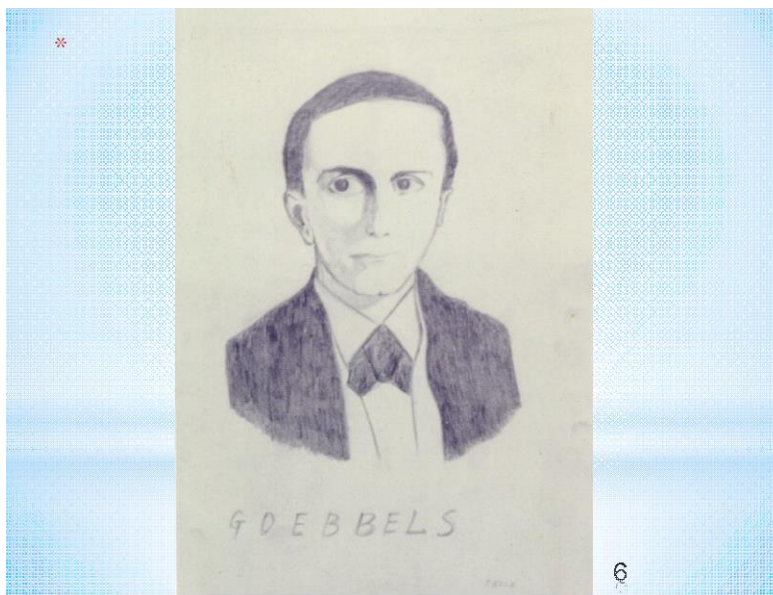


図 8

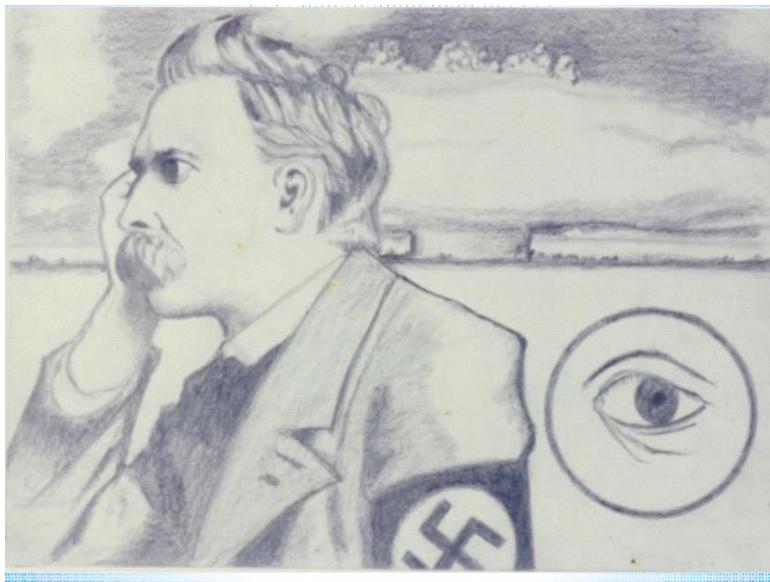
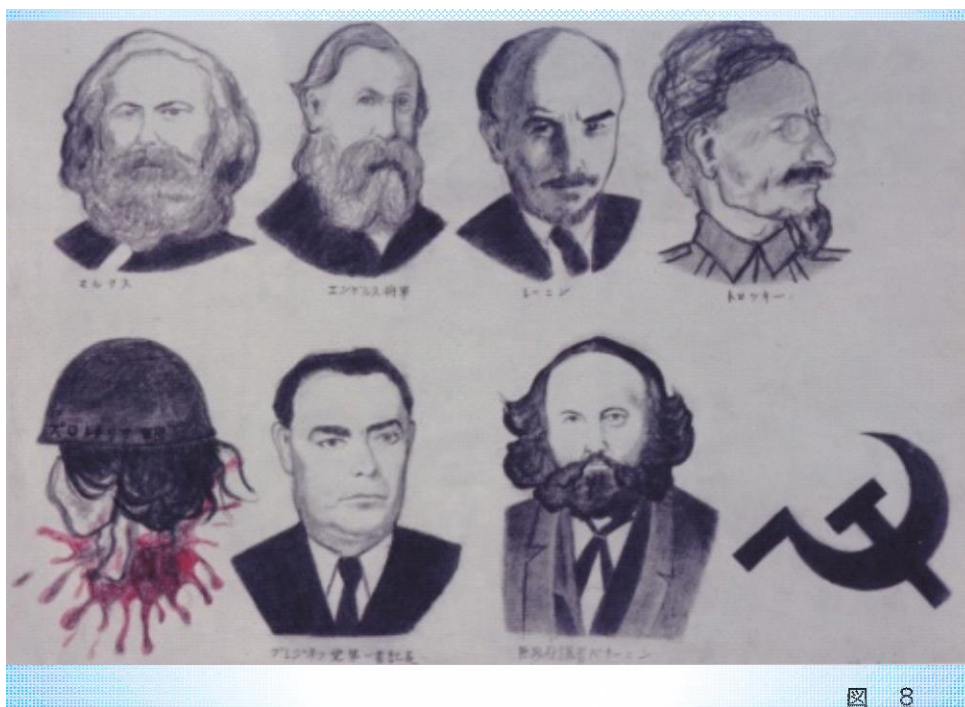


図 9



☒ 10

